

あいち農産物生産流通レポート

平成19年5月号

情報サロン		
・野菜の摂取動向と消費拡大に向けた取組について	(園芸農産課)	1
地域トピックス		
・『よいきゅうりの日』に“西三河のきゅうり”を地元の 学校給食へ寄贈	(西三河農林水産事務所)	2
東日本情報		
・大田市場における中晩柑の現状	(東京事務所)	3
西日本情報		
・佐賀県におけるハウスみかんの省エネ対策の取組について	(園芸農産課)	5
フラワーページ		
・東京都中央卸売市場における輸入切花の現状	(東京事務所)	7
青果		
・愛知産青果物の動向(名古屋・東京市場)		8
・名古屋・東京市場における青果物の5月の見通し		9
花き		
・切花・鉢花の5月の見通し(県内市場)		21
輸出入		
・主要農産物の輸出入実績(2007年2月)		25
関連指数		26

本書の内容についての問い合わせ先

愛知県東京事務所総務課物産情報グループ

(03)-5492-5400

愛知県農林水産部食育推進課

(052)-954-6417

野菜の摂取動向と消費拡大に向けた取組について

愛知県は、野菜の需要者ニーズの多様化が進むなか、産地指導の基礎データを収集するため、ふるさと農林水産フェア・秋(平成18年11月開催)に来場された311名に、家庭における主要野菜の摂取量の動向と野菜の摂取量などの聞き取りアンケートを行いましたので、この結果の一部を紹介します。

1 アンケート調査の結果

(1) 家庭における主要野菜の摂取量の動向(表1)

5～6年前に比べ摂取量の増えた野菜は、比較的簡単に調理できたり、多様な調理適性をもつ野菜(トマト、ブロッコリー、たまねぎ)等でした。逆に、摂取量の減る傾向にある野菜は、比較的調理に手間のかかったり、独特の香りのある野菜(セルリー、ふき、ちんげんさいなど)でした。

(2) 野菜の摂取量

回答のあった方の直近1週間の1人・1日あたりの野菜摂取量は約294gで、世代別にみると、70歳代以上は約336gと最も多く、20歳代は約238gでした。全体的に、若い世代ほど野菜の摂取量が少なくなる傾向がありました。

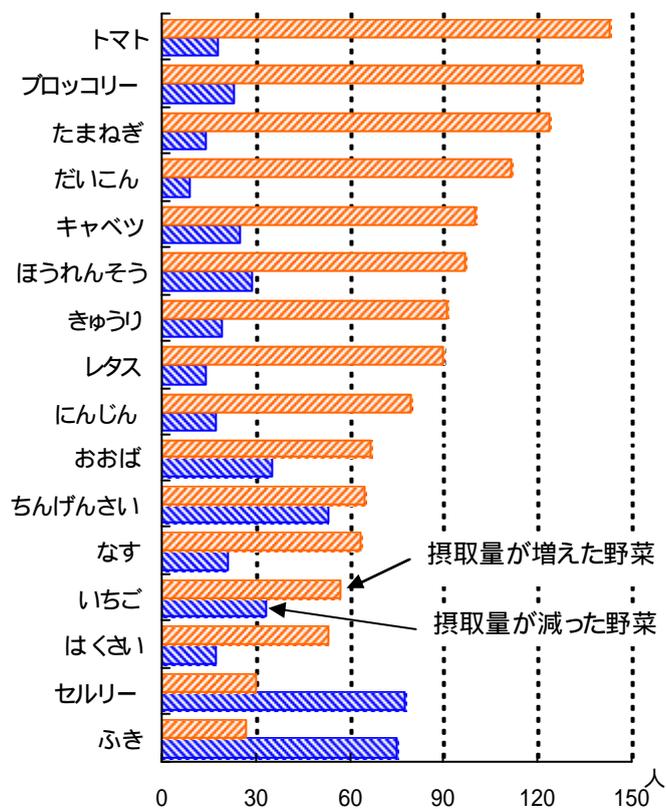


表1 主要野菜の摂取量の増減

2 野菜の消費拡大等に向けた取組方向

健康日本21は、成人1人・1日当たりの野菜の摂取目標を350g以上としており、今後、若い世代に対して、野菜の摂取量を増やす取組を通じて消費拡大につなげることが必要です。

この取組のポイントとして、健康志向への対応(野菜の機能性等に関する啓発活動)、食の外部化や個食化、簡便化志向の拡大への対応(外食、中食産業への需要拡大の働きかけ、簡易な調理方法の紹介活動)、効果的なPR手法の導入などが挙げられます。

県としては、これらの取組を積極的に展開し、目標の実現に努めていきます。

『良いきゅうりの日』に“西三河のきゅうり”を地元の学校給食へ寄贈
 ～ 市町やJAの範囲を越える広域部会として初めての取組み ～

良いきゅうりの日(4月19日)と食育の日(毎月19日)にちなみ、4月19日に西三河冬春きゅうり部会が初めて消費宣伝の試みとして、安城市と西尾市の学校給食用にと新鮮なきゅうりを無償で寄贈しました。

西三河地域のきゅうりは、主にJAあいち中央とJA西三河で栽培され、「三河みどり」の愛称で親しまれています。その生産者132戸はJAの範囲を越える広域組織として、「西三河冬春きゅうり部会」を組織し、減農薬栽培(いきいき愛知)等により安全・安心な「きゅうりづくり」に取り組んでいます。

贈呈されたきゅうりは、両市内の76の小中学校や幼稚園などで、きゅうりのサラダ等として食べられました。

また、両市内の小学校3校では、ふれあい給食が実施され、児童達は生産者からきゅうりの説明を受けながらいっしょに楽しく学校給食を食べました。児童からは、「シャキシャキとして、とてもおいしい」などと好評でした。

部会では、今後もこの取組みを続け、地元できゅうりがたくさん生産されていることを子ども達にPRし、食や農に対する子ども達の関心や理解を深め、食育や地産地消を一層推進していきたいとしています。



ふれあい給食できゅうりの説明をする生産者(安城市)



当日の給食(西尾市)

大田市場における中晩柑の現状

近年、京浜市場では、「いよかん」、「はっさく」、「あまなつ」の入荷量は著しく減少し、替わって「不知火(デコポン)」や新しい中晩柑品種が徐々に増加してきている(図1参照)。愛知県からは太田ポンカン、セミノールが入荷し、今年、初めて蒲郡市農協の「はるみ」が入荷した。

そこで、今回、中晩柑について、大田市場の入荷状況と東京青果(株)(東一)の入荷データを調査したところ、新品种の「はれひめ」、「せとか」、「はるみ」の入荷量が目立って増加している。

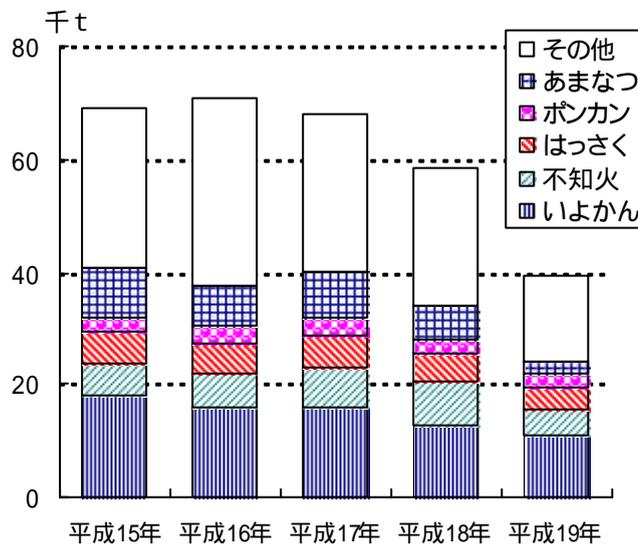


図1 東京都中央卸売市場の中晩柑品種の年次別入荷量

表1 東京青果における中晩柑入荷量 (t)

項目	平成17年	平成18年	平成19年
天草	110	102	96
不知火	3,451	3,527	4,113
はれひめ	2	11	96
せとか	95	133	171
はるみ	59	112	114
まりひめ	0	13	96
はるか	5	10	20
セミノール	205	140	122

注)平成17、18年は前年12月から5月まで
平成19年は前年12月から3月まで

1 市場の評価

(1) はれひめ

- 市場への入荷時期は12月から2月上旬まで。
- 見た目は温州みかんに似ており、大玉品種と違い差別化しづらい。
- オレンジのような香りがあり、食味も良いが、消費者の認知度が低く、試食販売が必要。

(2) はるみ

- 市場への入荷時期は2月～3月上旬まで。
- 傷、果皮障害が多く、外観があまりよくない。



東一の果実売り場並んだ中晩柑

- 外観はポンカンに似ており、差別化しづらい。

(3) せとか

- 市場への入荷時期は 12 月下旬から 4 月上旬まで。
- 施設栽培ものは大玉で色つやが良く、不知火（デコポン）に比べ、味無果の混入がほとんどないので安心して買える（＝贈答用として使用できる）。
- 露地栽培のものは病斑や傷があり、果形は施設栽培ものより一回り小さい。
- 風味に特徴があり、食べやすいので、リピーターが多い。

表 2 東京青果㈱へ入荷した中晩柑品種別・月別入荷量と単価 (H18.12～19.3)

(上段:kg、下段:円/kg)

項目	12月	1月	2月	3月	平均単価
天 草	22,793	31,049	41,795		430
	693	413	299		
不 知 火	371,552	501,345	1,082,959	2,157,261	502
	809	642	484	426	
はれひめ	22,793	31,049	41,795		430
	693	413	299		
せ と か	246	25,404	73,214	71,912	811
	963	1,064	828	704	
は る み		10,795	86,712	16,778	330
		386	321	340	
あ ま か		1,435	1,870		272
		285	261		
ま り ひ め		33,741	62,474		283
		364	232		
は る か			4,746	15,167	266
			261	267	
セミノール				121,540	337
				337	

2 品種特性

(1) はれひめ((清見×オセオラ)×宮川早生)

外見は温州みかんに似ており、皮がむきやすく食べやすい。酸味は少なく、風味はオレンジのようで、減酸が早く、12月中旬に成熟する。

(2) はるみ(清見×ポンカン)

大玉で、着色も良く、1月以降の食味が良い。ポンカンの優れた形質(甘い、むきやすい、香りの良い)を取り入れて育成した種の少ない品種。

(3) せとか((清見×アンコール)×マーコット)

小袋は薄く、肉質はやや弾力があり、味は濃厚である。成熟期は1月下旬から2月頃で、露地でも栽培できるが、無加温の施設栽培では、果実は大果となり、肉質が極めて柔軟で、多汁となる。



東一で競売された愛媛産せとか

佐賀県におけるハウスみかんの省エネ対策の取組について

近年の原油価格高騰に伴う暖房経費の増加等が本県ハウスみかん農家の経営を大きく圧迫している中、今後の原油価格高騰対策の参考とするため、ハウスみかん栽培の主産県である佐賀県の省エネルギー対策への取組状況を調査したので概要を紹介する。

1 調査先

佐賀県果樹試験場及び佐賀県東松浦農業改良普及センター

2 調査結果

(1) 佐賀県果樹試験場

省エネルギー対策として、「ハウスの保温性の向上」、「作型の変更」、「代替熱源の活用」という3つの観点から取り組んでいる。

ア ハウスの保温性の向上（空気膜フィルム）

ハウスの外張りに二重構造のフィルムを使用し、電動エアポンプ（写真1）でこのフィルム間に送風した空気層により保温性を向上させるもので、省エネルギー効果は、愛媛県の試験事例報告では20%としている。1㎡当たりのフィルムの価格は通常の農業用PO（ポリオレフィン系特殊フィルム）の2倍程度で、耐用年数は3年程度である。



写真1 空気膜電動エアポンプ

日照量の少ない冬季はハウス内への透過光量が減少し、生理落果も懸念されるため、佐賀県は、18年11月から行っている試験項目に、ハウス内の光環境も含めて調査を実施することとしている。

イ 作型の変更（雨よけ栽培）

雨よけ栽培は、露地栽培で行われている雨水を防ぎ、糖度を高めるためのシートマルチ栽培法を応用し、ハウスの天井のみをビニルで被覆するもので、既存ハウスをそのまま活用でき、露地栽培と比較してかん水管理が容易である。

しかし、梅雨前にビニルで被覆するため、樹体に及ぼす水分ストレスが大きく、また、マルチ栽培に比べ土壌が乾燥しやすいことから、小玉果の割合が比較的高く、適正な着果管理や土壌水分管理が必要である。

佐賀県では、雨よけ栽培は、ハウスみかんとして品質向上が望めなかったり、更新した中晩柑品種の生産等が確保できるまでの緊急対策的な取組として増加して

いる（実施園地数：H17年7園 H18年22園）。

ウ 代替熱源の活用(ヒートポンプ(写真2))

深夜電力を利用したヒートポンプ(業務用エアコン)による加温栽培は安価な電力料金を用いることから、重油加温栽培に比べランニングコストは40%程度の削減となる。ただし、ハウス内を24℃に維持するためには、ヒートポンプが10a当たり5～6台必要となり、機器設置費が高くなる。



写真2 ヒートポンプ

(2) 佐賀県東松浦農業改良普及センター管内の取組

ア 排熱回収装置（製品名：オイルヘラーズ）の設置

加温機から排出される熱を回収し、送風の加温(40℃程度)に再利用することから、加温効率が高まり、重油を15%程度削減できるとされている。しかし、この削減率については、同一条件で比較した試験事例はない。

この装置は1台当たり約40万円するが、17年度は、佐賀県内に県単独事業「魅力ある佐賀園芸農業確立対策事業」により165台(普及率10%程度)導入された。

イ 三重被覆の実施

従来の二重被覆に加え、ハウス内への日照量を落とさないよう側面の内張りの中に直径2cm程度の空気泡を持ったエアクッションを設置する三重被覆が行われている。

資材の価格が比較的安価(5,000円/2.5m×50mロール)なこと等から、生産現場で取組が増えている。

ウ その他

加温機の保守・点検の徹底による暖房効率の向上や、土壌改良、炭酸ガス施用機の導入、摘果量の削減による単収増加に取組、収益性の改善を図っている。

愛知県が試験研究している「変夜温管理技術」については、佐賀県では、日本海側で「寒冷」、「低日照量」という気象条件では「生理落果」、「着色不良」が懸念されるため行われていない。

3 今後の方向

佐賀県は、現状の省エネルギー対策として、「三重被覆+排熱回収装置」の組合せを最も有効と考えており、各種補助事業の活用等により設置を推進するとともに、ハウスミカンと中晩柑との複合経営が多いことから、重油使用量が少ない中晩柑(せとか、天草、麗紅等)に品種転換を進め、経営リスクの分散を図っていく方向にある。

東京都中央卸売市場における輸入切花の現状

最近、卸売会社の展示コーナーに置かれる輸入切花が増加している。平成18年の貿易統計によると、切花輸入量は34千t（前年比110%）、金額で263億円（同110%）となっている。4年前に比べ重量ベースで1.6倍、金額で1.4倍と漸増しつつある。品目別では、カーネーション、キク、バラが増加している。カーネーションは中国やベトナム、キクは中国やマレーシア、バラはケニアやインドからの増加が顕著である。

東京都中央卸売市場での平成18年の輸入切花の入荷は、99,358千本、全入荷量に占める割合は9.7%となっている。輸入ものの入荷量の割合が高い品目をみると、カーネーション類や洋ラン類が高い。キク類でも、スプレー菊は19.9%と高く、輪ギクは、まだ2.4%と低いものの、前年に比べ10倍と大幅に増加している。

このように切花の輸入は、以前は日持性等から困難と思われていた品目でも、鮮度保持技術や品種改良により大きな割合を占めるまでになっており、県内産地もその動向を注視する必要がある。

表 東京都中央卸売市場における輸入切花の本数と占有率

項 目	入荷本数(千本)	輸入占有率(%)	主な輸入先
キ ク 類	17,456	5.8	
うち輪ギク	3,787	2.4	中国
うちスプレー菊	13,346	19.9	マレーシア
カーネーション類	28,680	29.6	コロンビア
バ ラ 類	21,769	19.6	ケニア、インド
ゆ り 類	878	2.4	台湾
洋 ラ ン 類	23,474	78.3	台湾、タイ
そ の 他	7,101	-	-
輸 入 総 量	99,358	9.7	



台湾ブース（国際フラワーEXPO）



ケニアのバラ（FAJ 展示コーナー）

愛 知 産 青 果 物 の 動 向

青果物の見通し」及び「花きの見通し」ページにおいて使用する『変動の幅を表す用語』につきましては、下記の基準で記載しております。

わずか : ± 2 % 台以内
 や や : ± 3 ~ 5 % 台
 かなり : ± 6 ~ 15 % 台
 大 幅 : ± 1 6 % 以上

名 古 屋 市 中 央 卸 売 市 場 (品 目 : み つ ば)

	入 荷 量 (t)		卸 売 価 格 (円 / kg)		前年の主な他産地 (上位 3 産地)
		うち愛知産		うち愛知産	
18年実績	70	69 (98%)	317	312	愛知 (98%) 静岡 (1%)
19年見通し	70	70	300	-	
入荷量及び卸売価格の概要と見通し			卸売市場から産地への要望・提言等		
暖冬の影響で、冬場は毎年必要な加温しなくても、生育は良好であった。 入荷量は、作付減少により年々減少していたが、若い生産者の中には作付面積を増やす動きもあり、5月の入荷量は前年並みの見込みである。ただし、価格は前年をかなり下回る見込み。			3～6月期は最も生育がよいが、茶碗蒸しや吸い物など加熱用の需要が減る時期なのでおひたしの宣伝をする等の提案型で売ることが必要。 夏場は傷みやすいが、ここでの品質がブランドとなり、年間を通じた評価となるので高品質なものを生産して欲しい。		

東 京 都 中 央 卸 売 市 場 (品 目 ; ペ コ ロ ス)

	入 荷 量 (t)		卸 売 価 格 (円 / kg)		前年の主な他産地 (上位 3 産地)
		うち愛知産		うち愛知産	
18年実績	18	15 (84%)	434	436	ニュージーランド (5%) アメリカ (5%) オーストラリア (5%)
19年見通し	18	-	430	-	
入荷量及び卸売価格の概要と見通し			卸売市場から産地への要望・提言等		
北海道からの入荷は3月でほぼ終了し、4月の入荷は輸入ものが多い。4月中旬からは本県産の入荷が始まり、下旬から本格化するが、作付け面積の漸減傾向により入荷量はやや少なくなる見込み。 ニュージーランド、米国、オーストラリア産の輸入物が入荷量は価格をにらみながらとなる。 全体の入荷量、価格とも平年並みとなる見込み。			ペコロスは業務用を始めとして安定した需要がある。4月下旬から愛知産が本格的に入荷されるが、気温の上昇に伴い、乾燥不足による傷みの発生には十分に注意して欲しい。玉揃いは良いので、需要の多いM玉を中心として正確に選果してもらい、安定出荷をお願いしたい。		

関 連 指 数

項目 年月		消費者物価指数				
		総合	生鮮野菜	生鮮果物	肉類	魚介類
		全 国 平成17年 = 100 愛知県 平成17年 = 100				
全 国	18年10月	100.8	106.1	110.2	101.4	102.5
	11月	100.1	89.4	105.5	101.7	102.4
	12月	100.2	93.2	108.4	101.5	102.5
	19年 1月	100.0	104.2	114.7	102.3	103.8
	2月	99.5	95.7	109.9	101.9	102.5
愛 知 県	18年10月	100.9	107.1	101.5	101.6	103.6
	11月	100.3	89.8	102.4	99.4	102.3
	12月	100.4	91.5	103.6	99.6	103.6
	19年 1月	100.2	101.1	116.0	99.8	104.6
	2月	99.7	90.9	114.3	98.7	102.7

項目 年月		農業物価指数 (平成12年 = 100)				
		農産物総合	米	野菜	果実	畜産物
17年平均		99.7	91.9	104.7	90.7	109.3
18年10月		100.0	89.0	111.0	93.9	108.2
	11月	95.1	90.1	76.5	119.4	109.6
12月		102.8	89.7	92.3	137.3	112.8
	19年 1月	104.3	89.2	104.4	140.4	105.6
2月	100.2	90.7	92.9	125.4	107.6	

資料 農林水産省大臣官房統計部「農業物価指数」

資料 全 国・総務省統計局「消費者物価指数月報」
愛知県・愛知県県民生活部「名古屋市消費者物価指数」

名 古 屋 市 小 売 価 格 (円)													
品目 単位 年月	うるち	キ	は	ね	レ	ば	だ	に	た	き	ト	生	り
	米 (単一品種、 「コシカ 」以外)	ャ ベ ツ	く さ い	ね ぎ	タ ス	れ い し よ	い こ ん	ん じ ん	ま ね ぎ	ゅう り	マ ト	しい た け	ん(ご ぶ じ)
	5 kg	1 kg										100g	1kg
17年平均	2,293	170	165	586	397	304	151	340	217	522	636	178	521
18年10月	2,290	175	174	676	368	279	146	367	220	487	758	215	-
11月	2,265	106	107	571	281	276	103	306	210	395	639	208	-
12月	2,258	91	102	502	360	263	101	278	211	638	614	197	461
19年 1月	2,218	111	107	534	519	266	111	280	209	812	556	257	478
2月	2,218	97	105	460	469	269	98	255	214	584	624	185	494
品目 単位 年月	み	グ	オ	い	バ	キ	緑(せ	カ	き	バ	豚(口	牛(口	ま
	かん	レフ ル プ ツ	レン ジ	いち ご	ナ ナ	ウフ イル ツ	茶ん 茶)	 ネシ ヨ ン	く	ラ	肉 ス)	肉 ス)	ぐる
	1 kg						100g	1 本			1kg		
17年平均	548	291	362	156	240	723	618	155	171	306	234	792	480
18年10月	483	306	416	-	265	684	603	149	157	295	230	813	497
11月	487	369	423	-	242	694	603	146	159	304	238	809	496
12月	513	371	429	-	238	715	604	159	168	338	148	790	493
19年 1月	588	341	426	-	247	734	597	161	169	320	223	778	531
2月	654	359	528	182	259	721	586	161	175	322	214	763	521

資料 総務省統計局「小売物価統計調査報告」



あいち農産物生産流通レポート 407
平成19年5月発行
農林水産部食育推進課
〒460-8501
名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電話 (052) 954-6417